5/31（水）北海道新聞朝刊、医療と健康（くらし）の面へ掲載となりました

第３種郵便物認可　北海道新聞　2

〒060・8711　北海道新聞くらし報道部（郵便番号だけで届きます）　ファクス　011・210・5607　メール　kurashi@hokkaido-np.co.jp

頭部に磁気　うつ病新治療

薬使わぬ選択肢　道内でも始まる

うつ病で薬を使わない磁気を使った最新の治療が4月から道内で始まった。うつ病治療は従来、①休養②薬物療法③精神療法・カウンセリングが3本柱。薬物療法は抗うつ薬の服用が中心となるが、3割ほどの患者には効果がなかった。最新治療は抗うつ薬と違い、副作用が少ないのも特徴で、うつ病治療の新たな選択肢となりそうだ。

伝田健三院長

「反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）療法」で、米国では2008年に、うつ病の治療として承認され、世界各国では現在、一般的な治療として行われている。日本国内では19年に保険適用になり、一部の医療機関で治療が始まった。

治療は頭に専用の器具を当て、磁場を発生させて、脳の前頭前野の神経細胞を繰り返し刺激して、うつ病症状を改善させる。

うつ病患者の多くは脳の左側の前頭前野の機能が低下し、神経細胞間で情報を伝えるセロトニンやドーパミンなどの神経伝達物質の分泌が弱くなっているとされる。磁気刺激が電気エネルギーに変換され、神経細胞に伝わることで、神経細胞の活動性が変化し、症状の改善が図れるという。

治療を行う平松記念病院（札幌市中央区）の伝田健三院長（北大名誉教授）は「効き方に個人差があり、すべてのうつ病患者が改善するわけではないが、3～4割の人に抗うつ薬と同等の効果があると言われている」と説明する。

▶前頭前野を刺激　少ない副作用

治療は入院して行う。月曜日から金曜日の毎日、1日当たり40分程度、頭部に磁気刺激を与える。治療期間は4～6週間で、磁気刺激の上限は30回。

対象は18歳以上で、うつ病の診断を受け、薬物療法で十分な改善が得られず、中等度以上の抑うつ症状を示している人。双極性障害（そううつ病）や発達障害、適応障害、てんかん発作がある人は対象外。また、頭部に人工内耳や脳動脈瘤の破裂を防止する磁性体クリップなどの金属が入っている人、心臓ペースメーカーを使用している人も治療を受けられない。

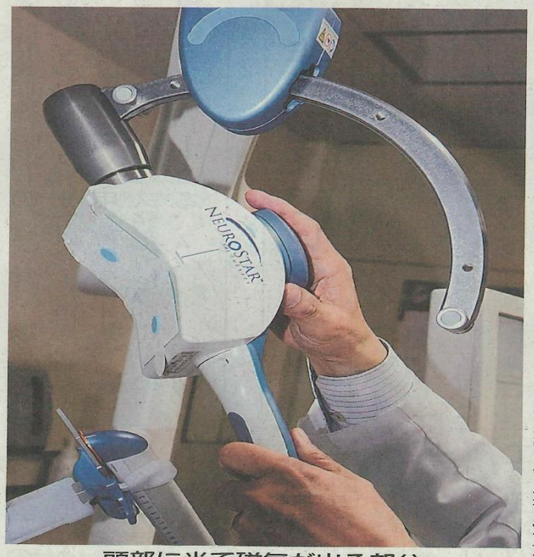
治療を受けた際、顔面の不快感や肩こり、頭痛などの副作用を生じることが最初あるが、慣れるに従って気にならなくなるという。けいれんや失神などの重篤な副作用は0・1％未満で、抗うつ薬によるけいれん誘発の危険率（0・1～0・6％）より低い。

▶4～6週間入院　対象に制限も

治療は「精神科の救急対応ができる」などの条件があるため、国内では現在25の病院でしか行われておらず、道内では平松記念病院のみ。

伝田院長は「副作用が少なく、抗うつ薬より安全で、治療費も一般的な入院費用程度。ただ、医師、作業療法士、看護師が1時間患者と付きっきりになるため、受け入れは現在1日4人が限度。治療を希望する人はかかりつけの精神科医に相談してほしい」と話している。（編集委員　荻野貴生）

反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）療法の練習を行う病院関係者。器具の取り付けから磁気刺激、取り外しまで1時間程度かかる



頭部に当て磁気が出る部分